

# 特集 「教師の大変さと学校」

ここ数年の間に学校・職場は、大きく様変わりし、

教師たちは出口の見えない「閉塞感」と、教育の専門家としての誇りを失いがちになっています。例えば、

▼校長権限が強化され、トップダウンによる学校運営が日常的になり、教員間の合意形成を図るための職員会議は、校長の上意下達の諮問機関に変わり、自由な意見や批判的な発言が抑えられる。

▼小中高における「授業時数の確保の徹底」が、時間におされて教科の打ち合わせなど教員同士の諸会議が形式的になり、本質的な論議が棚上げされる。

▼夏休みなど「自宅研修」の権利の規制と官制研修の強化で、自主的な教育研究の機会が奪われ、生徒もいない学校に毎日出勤させられる。

▼行政から膨大な「報告文書作成」が義務づけられ、子どもたちと接するゆとりや教材研究の時間的余裕が奪われる。

▼「不適格教師」の認定、成績主義、「在任期間短縮」

の教員人事異動等々。

こうした状況は、教師が「教育を司る」という自主的権限を無力化させ、教師としての誇りを持たなくさせているように思われます。つまり、これまでの単なる量的なものであった多忙から、教師の精神的な主体性や創造性が奪われ、したがって達成感や充実感が何もなく、多忙感だけが残るといふふうに多忙が質的に変化してきていることです。

このように、教師の仕事に質的变化をもたらしている政策の背景には、権力や行政の「新公共管理(New Public Management)」といわれる学校と教師に対する新しい管理方式(民間企業で成功したマネジメント手法の公共部門への導入を主軸とする考え方)が貫かれているといわれています。これがいまはやりの「構造改革」の実態なのだと思います。